ヴァンパイアの定義にまつわる問題の解決の試み
― 1732 年の事件と文学への進出という観点から ―

森　口　大　地

1．ヴァンパイア概念の不明確性

ヴァンパイアという単語が指す概念が不明確であるという問題は、既に民俗学者のヨーゼフ・クラッパーによって 1909 年に指摘されている。[1]「ヴァンパイア」は、現在のセルビアにあたる地域で起きた事件の報告書によって、東南欧という〈周縁〉から、西洋という〈中心〉に持ち込まれた外来の概念であり、「少なくとも学界では、それはまだ狭く限定されており、墓から戻ってきて生者の血を吸う死者だけを意味すると理解されていた」[2]。後に詳しく見るが、この報告書では、「吸血者（de[r] Blutsauger[ ]）の活動の背後に、他のすべての特徴が後退してしまって」おり、「ヴァンパイアと吸血者は一つの概念だった」[3]。しかし、こうした吸血行為を主な特徴とする死者だけでなく、墓の中で己の服や体をかじるという「魔術的行為」によって生者に害を及ぼす死者や、「その視線によって魔術的に」生者を殺す死者、「上にのしかかったり、首を絞めたり、苦しめたりする死者」、「厩舎の家畜を苦しめたり、食べ物を平らげたり、駄目にしたりしに」戻ってくる死者、これ

1　Vgl. Josef Klapper: Die schlesischen Geschichten von den schädigenden Toten. In: Theodor Siebs（Hrsg.）: Mitteilungen der schlesischen Gesellschaft für Volkskunde. Bd. XI. Breslau 1909, S. 58–93, hier S. 58–62.

2　Ebd., S. 59. 以下、クラッパーからの引用に関しては、傍点は原文隔字体。

3　Ebd.

らもまた、ヴァンパイアのもとにまとめられ、理解される。[4] 害をなす死者たちだけでなく、特に危害を加えることなく「死後も妻と性交を続ける亡くなった者」[5] までもが、ヴァンパイアとみなされる。さらに、クラッパーは、復讐者としての死者にも言及しつつ、「ドン・ファン伝説までもヴァンパイア物語の輪から除外する理由はない」[6] と、やや誇張気味にヴァンパイア概念の不明確性を示している。

> よって、ヴァンパイア概念を学術論文に採用されたときのように狭義に再限定し、他のグループの物語に対しては否定するか、あるいは、この概念をそもそも完全に放棄するかのいずれかの可能性しか残されていないのである。[7]

ヴァンパイア概念の不明確性は、近年の研究でも指摘されているが、[8] 特に問題となるのは、この不明確性が、時には研究者自身によっても推し進め

---

4 Ebd., S. 59f.

5 Ebd., S. 60f.

6 Ebd., S. 61.

7 Ebd., S. 61f.

8 Vgl. Bernhald Unterholzner: Die Erfindung des Vampirs. Mythenbildung zwischen populären Erzählungen vom Bösen und wissenschaftlicher Forschung. Wiesbaden 2019, S. 14f.; Nick Groom: The Vampire. A New History. New Haven / London 2018, p. xv. ベルンハルト・ウンターホルツナーは、ペーター・マリオ・クロイターによる民俗学上の最大公約数的な定義でさえ、しばしば破られると指摘しているが、いくつかの研究書を見るだけでも、それは明らかである。注9参照。「ヴァンパイアとは蘇る死者であり、墓から出て、生者の血を吸い、家畜を駄目にしたり、あるいは他の害をなしたりする。故に、それは悪魔的な存在（dämonisches Wesen）ではなく、幽霊（Geist）ではなく、人間でもない、さまよう死体（ein wandelnder Leichnam）である」Peter Mario Kreuter: Der Vampirglaube in Südosteuropa. Studien zur Genese, Bedeutung und Funktion. Rumänien und der Balkanraum. Diss, Berlin 2001, S. 17. Zit. nach Unterholzner, ebd., S. 15. ヴァンパイア研究の蓄積が多くない日本でも、平賀英一郎によって、民俗学的な観点から、ヴァンパイアの定義の問題がとりあげられている。平賀英一郎『吸血鬼伝承「生ける死体」の民俗学』中央公論新社 2000 年、15~18 頁参照。

られることである。[9] ヴァンパイアは、先行研究や一般向け雑学本、様々な事典・辞書類において定義されてきた。これらは、ヴァンパイアの最大公約数的な定義――吸血による加害という習性と、生ける屍であること――を述べて終わるか、多少詳しめの書籍なら、古代から中世、近世にかけての類縁の怪物、18 世紀のセルビアの事件、18・19 世紀以降の文学作品という事例を無作為に引用する。その結果、しばしばヴァンパイアは、他の類似の概念

9 例えば、『ドイツ迷信辞典（Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens)』の「ヴァンパイア」の項目を見ると、「ナーハツェーラーを見よ」と書かれており、ヴァンパイアがナーハツェーラーの下位概念として扱われている。「本来の意味でのナーハツェーラーは、何らかの方法で生者を連れて逝くと明らかに言われている死者と言うことができよう。その特殊な例が、ヴァンパイアである〔傍点原文隔字体〕」Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. Herausgegeben unter besonderer Mitwirkung von E. Hoffmann-Krayer und Mitarbeit zahlreicher Fachgenossen von Hanns Bächtold-Stäubli. Band VI. Berlin / Leipzig 1934 / 1935, Sp. 812–823, Art. „Nachzehrer“, hier Sp. 813.「ナーハツェーラーを見よ」Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. Band VIII. Berlin / Leipzig 1936 / 1937 , Sp. 1503, Art. „Vampir“. この辞書が編纂された 1930 年代には既に、シュテファン・ホックや、モンタギュー・サマーズなどのヴァンパイア研究の草分けが登場しており、彼らの著作が「ヴァンパイア」を題に掲げていることを考えると、この辞書がドイツの迷信についてのものだとしても、ナーハツェーラーを大見出しとして使用することの奇異性が浮き彫りになる。彼らを抜きにしても、ほとんどの辞書・事典は、「ヴァンパイア」の項目でヴァンパイアについて書いている。文学作品に関しては、ゴットフリート・アウグスト・ビュルガーの『レノーレ（Lenore)』（1773）や、サミュエル・テイラー・コウルリッジの『クリスタベル（Christabel)』（1816）がヴァンパイアを扱った作品とみなされることもある。マシュー・バンソンは『レノーレ』の作者ビュルガーを、「初めて文学にヴァンパイアを登場させた偉大な詩人の一人」と説明している。Cf. Matthew Banson: TheVampire Encyclopedia. New York 1993, p. 36, art. ‘Bürger, Gottfried’;　マシュー・バンソン『吸血鬼の事典』（松田和也訳）青土社 1995 年、303 頁、「ビュルガー、ゴットフリート」。ハイデ・A・クロフォードは『レノーレ』のヴィルヘルムをヴァンパイアとみなしている。Cf. Heide A. Crawford: The Origins of the Literary Vampire in German Horror Ballads from the Eighteenth and Early Nineteenth Centuries. Diss. The Pennsylvania State University 2004, pp. 96ff. ジェイムズ・B・トウィッチェルは『クリスタベル』のジェラルダインをヴァンパイアとみなしている。Cf. James B. Twitchell: The Living Dead. A Study of the Vampire in Romantic Literature. Durham, N. C. 1981, pp. 40f. しかし、ヴィルヘルムは蘇った死者でしかなく、ジェラルダインは、超自然的な力を示すだけでしかない。

を代表し、適用される範囲が恣意的な、便利な総称として用いられる。[10]

あるいは、吸血行為や生ける屍であることという、中心的であるとほぼ合意されているヴァンパイアの性質が、象徴的に拡大されて用いられる場合もある。[11] この方向性は、様々な領域へのヴァンパイアの適用可能性と、新歴

---

10 一例を挙げるなら、古代ヘブライの伝承に登場するリリスや、古代ギリシャのラミアやエンプーサといった怪物が「原始ヴァンパイア（Proto-Vampire）」とされている。Vgl. Clemens Ruthner: Vampir. In: Hans Richard Brittnacher / Markus May（Hrsg.）: Phantastik. Ein interdisziplinäres Handbuch. Stuttgart / Weimar 2013, S. 493–500, hier S. 494; Klaus Völker: Historischer Bericht. In: Dieter Sturm / Klaus Völker（Hrsg.）: Von denen Vampiren oder Menschensaugern. Dichtungen und Dokumente, S. 505–533, hier S. 507f. こうした流れには、ヴァンパイア研究の草分けの一人であるモンタギュー・サマーズも、少なからず影響していると考えられる。サマーズは、ヴァンパイアを題に冠した書籍で、グールやキョンシーなど、東洋までも視野に入れて、蘇り害をなす死者に類する怪物を蒐集している。Cf. Montague Summers: The Vampire. His Kith and Kin. A Critical Edition. Berkley（CA）2011, pp. 217–270.

11 例えば、フランツ・アントン・メスマーのメスメリズムやジークムント・フロイトの『トーテムとタブー（Totem und Tabu）』（1913）で紹介されるカニバリズムに依拠して、ヴァンパイアが与える心理的効果が解釈される。Vgl. Jürgen Barkhoff: Vampirismus und Mesmerismus. Parasitär-fluidale Kommunikation im Vergleich. In: Christian Begemann / Britta Herrmann / Harald Neumeyer（Hrsg.）: Dracula Unbound. Kulturwissenschaftliche Lektüren des Vampirs. Freiburg i. Br. / Berlin / Wien 2008, S. 75–97; Harald Neumeyer: Machttechnologie des Unbewußten. Zu Hypnose und Vampirismus im 19. Jahrhundert. In: Dracula Unbound, ebd., S. 99–121. あるいは、文学や「著者性（Autorschaft）」の持つ不死性や増殖性がヴァンパイアになぞらえられたり、ヴァンパイアの寄生性が、間テクスト性の象徴としてとらえられたりする場合もある。Vgl. Britta Herrmann: Buchstaben sind Vampire. Zur Poetik des Untoten（Herder, Hoffmann, Eichendorff）. In: Dracula Unbound, ebd., S. 141–162; Silke Arnold-de Simine: Wiedergängerische Texte: Die intertextuelle Vernetzung des Vampirmotivs in E. T. A. Hoffmanns „Vampirismus"-Geschichte（1821）. In: Poetische Wiedergänger. Deutschsprachige Vampirismus-Diskurse vom Mittelalter bis zur Gegenwart. Tübingen 2005, S. 129–145. また、生きながらにして死んでいるだけでなく、その始まりからセルビアという境界地域に位置してもいたヴァンパイアに「境界性（Liminalität）」を見出し、様々な境界を攪乱するという象徴的な役割が付与されることもある。Vgl. Ruthner, a. a. O.（Anm. 10）, S. 493f.; Thomas M. Bohn / Kirsten von Hagen: Der Vampir als europäischer Mythos – einleitende Überlegungen. In: Dies.（Hrsg.）: Mythos Vampir – Bissige Lektüren. Bonn 2018, S. 5–8, hier S 7f.

史主義やカルチュラル・スタディーズなどの影響により、多様化や学際化を推し進める。[12] こうした観点が学術的意義を有することは言うまでもなく、本論はそれを否定するものではないが、多様化や学際化がヴァンパイア概念の曖昧化を招くこともまた事実としてある。

この難しさは、「ヴァンパイアをめぐる言説が、200年の間にいかに増殖したか」[13] という問題に端を発する。ヴァンパイアは、ハンス・ブルーメンベルクの言う「神話」なのであり、「神話とは、その語りの核の安定性が高度な物語であり、同様に、周辺的な変形能力が際立った物語である」。[14] この問題を解決するには、クラッパーや、近年ではニック・グルームなどが述べるように、ヴァンパイアを特定の条件のもとに限定して、狭く定義することが必要である。

---

12 Vgl. Christian Begemann / Britta Herrmann / Harald Neumeyer: Diskursive Entgrenzung. Der Vampir im Schnittpunkt kultureller Wissensbestände. In: Dracula Unbound, ebd., S. 9–32, S. 13; Julia Bertschik / Christa A. Tuczay: Poetische Wiedergänger: Einleitung. In: Poeteische Wiedergänger, ebd., S. 7–10, hier S. 7; Bohn / von Hagen, In: Mythos Vampir, ebd. ベーゲマン／ヘルマン／ノイマイヤーとベルチク／トゥツァイは、論文集の導入において、どちらも新歴史主義の領袖スティーヴン・グリーンブラットを引用している。特に前者は、現代においてヴァンパイアが多様な方面に進出していることを受け、「このように言説の境界が取り払われること（[d]iese diskursive Entgrenzung）は、これまでほとんど実践されてこなかったカルチュラル・スタディーズ的、学際的分析を必要とし、本書に *Dracula Unbound* という題を与えた」と――ここでもヴァンパイアはドラキュラという名前に置き換えられる――述べ、研究領域間の垣根を払った広い意味でのヴァンパイアを扱う方向性を強調している。Vgl. Begemann / Hermann / Neumeyer, ebd. 新歴史主義については以下を参照。H・アラム・ヴィーザー「序論」: H・アラム・ヴィーザー編『ニュー・ヒストリシズム ― 文化とテクストの新歴史性を求めて ―』（伊藤詔子／中村裕英／稲田勝彦／要田圭治訳）英潮社 1992年、vii~xx 頁所収。

13 Unterholzner, a. a. O.（Anm. 8), S. 14. ヴァンパイアが西洋に知られるきっかけとなった、1732年のセルビアの事件まで遡って考慮するなら、期間を300年に広げることもできる。

14 Vgl. Hans Blumenberg: Arbeit am Mythos. Frankfurt a. M. 1986, S. 40. Zit. nach Begemann / Hermann / Neumeyer, a. a. O.（Anm. 12), S. 11.

私は、ヴァンパイアとは、一定の場所の正確な時期に遡って認識されうるものであり、その結果、とりわけ血、科学、社会、文化に関係して認識されうる明確な兆しや性質を持つものであると主張する。ヴァンパイアは、種々雑多な民間信仰の不透明な年代記に、その起源を持っているかもしれないが、彼らはヴァンパイアとして（as vampires）ヨーロッパの血脈に入るときにのみ、ヴァンパイアという資格を持った（qua）「ヴァンパイア」となるのである。不死者（the undead）の総合的なパンテオンの一員として入るときではない。この不死者の多く――幽霊（ghosts）、グール（ghouls）、蘇る死者（revenants）――は、何世紀にもわたって血への嗜好を示してきた。しかし、彼らはヴァンパイアではない。[15]〔傍点原文イタリック〕

グルームは、他の類縁の怪物との区別、そして受容経緯をヴァンパイアの定義に際して重視している。本論は、この方向性にしたがい、ヴァンパイアの定義を試みる。まず、これまでの研究でほぼ認められている、吸血行為と生ける屍／蘇る死者であること、という二つの特徴を現代にまで通用するヴァンパイアの中心的な定義とみなし、それが適当であることを確認する。なぜなら、類縁の怪物との区別に際して重要な、ヴァンパイアの特殊な受容経緯である 1732 年の事件は、この二つの特徴を伝え、後世にまで伝わるからである。この事件は、当時の西洋社会を騒がせ、これをきっかけに大量の論文や新聞雑誌によって報じられた――つまり、ヴァンパイアの特徴の流布に貢献していると言える。[16]

15　Groom, op. cit.（n. 8), p. xv. クレメンス・ルトナーも、同様のことを述べている。「だが、ヴァンパイアやヴァンピリスムス（Vampir/ismus）をどのように定義し、記述すべきかを確定する際には、常に我々がどのヴァンパイアのことを意味しているのかという問いが、まず答えられなければならない」Vgl. Ruthner, a. a. O.（Anm. 10), S. 494.

16　トーマス・M・ボーンによれば、1732 年に 11 本、1733 年に 2 本のヴァンパイア論文が世に出ており、ガーボル・クラニツァイによれば、ドイツ語圏、イギリス、フランスあわせて 1733 年には 33 冊もの出版物が刊行されている。Vgl. Thomas

これに加え、本論では、対象となるヴァンパイアを、19世紀前半の文学テクストに限定し、特にジョン・ポリドリの『ヴァンパイア（The Vampyre）』（1819）で施されるヴァンパイアの説明に着目し、当時のヴァンパイアがギリシャを想起させる存在であることを明らかにする。ヴァンパイアの受容経緯を語る際に、18世紀前半のセルビアの事件を無視できないのと同様に、19世紀初頭の文学進出を無視することもまた不自然である。[17] そのため、この時代に広く流通したヴァンパイア像を押さえておくことは、研究上の意義を有する。ポリドリのテクストの幅広い受容を考えるなら、[18]

M. Bohn: Der Vampir. Ein europäischer Mythos. Köln / Weimar / Wien 2016, S. 128f.; Gábor Klaniczay: Historische Hintergründe: Der Aufstieg der Vampire im Habsburgerreich des 18. Jahrhunderts. In: Poetische Wiedergänger, a. a. O.（Anm. 11）, S. 83–111, hier S. 100. また、クラウス・ハンベルガーが蒐集した資料体を見るなら、1732年以前の蘇る死者についての文献は数えるほどしかない。Vgl. Klaus Hamberger: Mortuus non mordet. Kommentierte Dokumentation zum Vampirismus 1689–1791. Wien 1992, S. 272–285, 287–291.

17 クラッパーは、ヴァンパイアの故郷をブルガリアだと判断して、定義をそこに限定すべきだとしている。「今日、神話的な概念の中で、ヴァンパイアの概念以上に、様々な特徴に満ちて、不明瞭なイメージが支配しているものはない。だからこそ、民俗学研究の概念上の明確な境界づけに資するためには、「ヴァンパイア」という名称を再びその故郷であるブルガリアに限定し、比較民俗学が、このような多面的な表現を用いる代わりに、これまでその下にまとめられてきた個々の民族にとってのイメージに対して、これらのイメージ群の本質を特徴づける明確な表現を導入することが望ましい」Klapper, a. a. O.（Anm. 1）, S. 58. しかし、対象を民俗学上のヴァンパイアに限ったとしても、これには賛同できない。ヴァンパイアの語源については、現状では明確に答えが出ておらず、その出身地については、ヴァンパイアに限らず東南欧の類縁の怪物が伝わる地域が互いに重なっていることを考えると、一つの土地に限定しがたいからである。語源については、以下を参照。Katharina M. Wilson: The History of the Word “Vampire”. In: Journal of the History of Ideas, Vol. 46, No. 4（Oct.–Dec., 1985）, pp. 577–583; A. Brückner: Etymologien. In: Slavia. Časopis pro slovanskou filologii 13（1935）, S. 272–280, hier S. 278–280. 類縁の怪物については、以下を参照。Bohn, a. a. O.（Anm. 16）, S. 31–107, 159–271; Ruthner, a. a. O.（Anm. 10）, S. 494; 栗原成郎『スラヴ吸血鬼伝説考』河出書房新社 1991年；平賀、上掲書（注8）。

18 ポリドリの『ヴァンパイア』は、出版の同年に七版を重ねたばかりか、1830年までにはイタリア語やスペイン語、スウェーデン語にまで翻訳されている。Cf. Chris

19 世紀前半、少なくとも 1820 年代に限っては、ヴァンパイアは『ヴァンパイア』を通して広まったと考えてよい。ただし、そのポリドリのテクストもまた、それに先行するヴァンパイアを扱ったテクストに依拠してヴァンパイアを受容しているため、そこにも目を向けなければならない。

２．1732 年の事例から抽出される中心的特徴[19]

２―１．1732 年以前の事例

西洋におけるヴァンパイアの受容に決定的な役割を果たしたのが、1732 年の事件であることは論を俟たない。[20] ただ、1732 年以前にもヴァンパイア事件が起きてはいる。よく知られているのは、1725 年にセルビアの「キソロヴァ（Kisolova）」（現地語ではキシレヴォ Kisiljevo）[21] で発生したもので、この事件を伝えた『ウィーン日報（Wienerisches Diarium）』の記事（1725 年 7 月 21 日）は、現時点では、ドイツ語圏の出版物にヴァンパイアという単語が用いられた最初の例と考えられる。しかし、この事件は、直接的にヴァン

Baldick / Robert Morrison: Introduction. In: Chris Baldick / Robert Morrison (eds.) : The Vampyre and Other Tales of the Macabre. Oxford 1997, pp. vii–xxii, here p. x. ヘンリー・R・ヴィーツも、『ヴァンパイア』の刊行速度と海外への広まりについて詳述しており、彼によれば、同年のロンドン版は五版あるという。Henry R. Viets: The London Editions of Polidori's "The Vampyre". In: The Papers of the Bibliographical Society of America, Vol. 63, No. 2 (Second Quarter, 1969), pp. 83–103, here p. 84, 97. ロクサーナ・スチュアートは、1820 年だけで 7 本ものヴァンパイアを扱った戯曲を挙げている。Cf. Roxana Stuart: Stage Blood: Vampires of the 19th-Century Stage. Bowling Green (OH) 1994, p. 261. フランスでの流行を受けて、ドイツ語圏でも舞台翻案が手がけられた。詳しくは以下を参照。拙論「矮小化されるルスヴン卿――1820 年代の仏独演劇におけるヴァンパイア像」京都大学大学院独文研究室『研究報告』第 33 号（2020 年）、1~23 頁所収。

19 本章の内容は、以下の拙論に依拠しつつ、それを更新したものである。「ヴァンパイアはなぜ腐らないのか――ヴァンパイアをめぐる 1730 年代ドイツ語圏の学説」京都大学大学院独文研究室『研究報告』第 31 号（2018 年）、1~21 頁所収。

20 注 16 参照。

21 Vgl. Bohn, a. a. O. (Anm. 16), S. 109. 以下、現地語のつづりは全てボーンに依拠する。

パイアの流布に繋がったとは言い難い。なぜなら、この事件後には、それほどヴァンパイアについての論文や新聞雑誌の記事が出回ることがなかったからである。[22] プリンツ・オイゲン・フォン・ザヴォイエンが長官を務めるハプスブルク帝国宮廷軍事局は、7月25日に、ベオグラードに在中しているセルビア地方担当の総司令官であるカール・アレクザンダー・フォン・ヴュルテンベルク公にさらなる調査を命じたが、8月の彼の報告書をもって事件は解決済みとみなされた。『数日前に上ハンガリーのキソロヴァという村で発生した恐るべき事件（Entsetzliche Begebenheit, welche sich in dem Dorf Kisolova in Ober-Ungarn, vor einigen Tagen zugetragen)』というパンフレットも出回ってはいたが、その影響はさほど大きくなかった。事実、学者たちの間でもほとんど反応はなく、例外的にミヒャエル・ランフトが『墓の中の死者の咀嚼についての歴史的・批判的論考（Dissertatio Historico-critica de Masticatione Mortuorum in Tumulis)』（1725）という論文内で、1725年の事件報告書を引用した程度であった。[23] ただ、1725年の事件は、1732年の事件が取り沙汰されるようになったときに、併せて紹介されることが多かった。その意味では、ヴァンパイアの流布に貢献したのは1732年の事件だが、それと共に1725年の事件もまた広まったと考えられる。[24]

『ウィーン日報』には「Vampyri」という単語が用いられており、その意味では明確にヴァンパイアを扱った事件が報じられていると言える。

> 〔…〕そのような連中（彼らはVampyriと呼ぶ）には様々な印 ― その体は腐敗せず、皮膚、髪、ひげ、爪が成長する ― が見られるはずなの

[22] Vgl. Hamberger, a. a. O.(Anm. 16), S. 45f.; Peter Mario Kreuter: Vom „üblen Geist“ zum „Vampier“: Die Darstellung des Vampirs in den Berichten österreichischer Militärärzte zwischen 1725 und 1756. In: Poetische Wiedergänger, a. a. O. (Anm. 11), S. 113–127, hier S. 115.

[23] Vgl. Michael Ranft: Dissertatio Historico-critica de Masticatione Mortuorum in Tumulis. Lipsiae 1725, S. 6f.

[24] Vgl. Aribert Schroeder: Vampirismus. Seine Entwicklung vom Thema zum Motiv. Frankfurt a. M. 1973, S. 74–79, bes. S. 79.

で、臣民たちはペーター・プロゴヨヴィッツ（Peter Plogojoviz）の墓を暴き、実際に上記の印が発見できるかどうか見ることを決めた。[25]

この「ペーター・プロゴヨヴィッツ」（現地語ではペタル・ブラゴイェヴィチ Petar Blagojević）が、村人たちによってヴァンパイアだと信じられた人物であるが、襲われた人々は、死んだはずの彼が「就寝中にやってきて、上にのしかかり首を絞めてきた、そのためにきっと死ぬだろう」と証言した。また、報告書によれば、「プロゴヨヴィッツ」の死体の口内に血が見られた際には、「彼が殺した相手から吸ったものである」と村人たちは証言しているという。ここでは、ヴァンパイアは、腐敗しない体、成長する体の一部、絞殺行為、吸血行為などを特徴とするのである。

1725 年以前であっても、蘇って害をなす死者についてであれば、報告が存在する。ディーター・シュトゥルム／クラウス・フェルカーは、マルティン・ルターの卓上演説（Tischrede）6823 番、マルティン・ベームの説教（1601）、フィリップ・ローアの『死者の咀嚼についての論考（Dissertatio de Masticatione Mortuorum）』（1679）、ガブリエル・ルチャチンスキィの『ポーランド王国自然史（Historia Naturalis Curiosa Regni Poloniae）』（1721）などの例を引いている。[26] ここで語られるのは、墓の中で聞こえる咀嚼音や、腐敗しない死体、屍衣や己の肉を噛んでいる死体についてであり、その特徴は確かに、一部ではあるが、1725 年や 1732 年の事件で報告されたヴァンパイアと重なる部分もある。しかし、ヴァンパイアという単語は見られない。これらがヴァンパイアの流布に繋がったわけでもないことは、

---

25 Wienerisches Diarium, Anno 1725, Num. 58, für den 21. Julii. Wien 1725, S. 11f, hier S. 11; Hamberger, a. a. O.（Anm. 16）, S. 43–45, hier S. 44. 訳出にあたっては以下を参考にした。Paul Barber: Vampires, Burial, and Death. Folklore and Reality. New Haven / London 1988, pp. 6f.; ポール・バーバー『ヴァンパイアと屍体』（野村美紀子訳）工作舎 1991 年、21~23 頁。

26 Vgl. Von denen Vampiren, a. a. O.（Anm. 10）, S. 441–443. 以下でも抄訳を確認できる。種村季弘『吸血鬼幻想』河出書房新社、1985 年、40~41、45~46 頁参照。

後年の論文の量を見れば明らかだと言える。[27]

[27] サミュエル・ジョンソンの『英語辞典（English Dictionary)』（1828）と、ウォルター・スキートの『英語語源辞典（An Etymological Dictionary of the English Language)』（1884）にも、古い時代への言及がある。Cf. Johnson's English Dicitionary as improved by Todd, and abridged by Chalmers; with Walker's Pronouncing Dictionary, combined: to which is added, Walker's key to the classical pronunciation of Greek, Latin, and scripture proper names. Boston 1828, p. 992, art. "VAMPIRE"; An Etymological Dicitonary of the English Language. By the Rev. Walter W. Skeat, M. A. Second edition, revised and corrected. Oxford 1884, p. 679, art. "VAMPIRE". ジョンソンの辞典は、ヴァンパイアの説明の後に Ricaut と名前を記すのみで、詳細な出典は載せられていないが、これはポール・リコーの『ギリシャとアルメニア教会の現状、西暦 1678 年（The Present State of the Greek and Armenian churches, anno Christi 1678)』（1679）を指していると考えられる。スキートの辞典は、ジョンソンの辞典に触れつつ、「リコーが、彼の『ギリシャとアルメニアの教会の現状（1679)』の 278 頁で、この迷信的な信念〔ヴァンパイア〕に興味深い説明を与えている」と書いている。ただし、ウィルソンによれば、リコーはヴァンパイアを名指しで挙げておらず、ギリシャ教会における破門について述べているだけだという。Cf. Wilson, op. cit.（n. 17), p. 580.
サマーズも、リコーがヴァンパイアという単語を用いていないことに言及している。Cf. Summers, op. cit.（n. 10), p. 23. 日夏耿之介もリコーに言及しているが、単語の使用については記していない。日夏耿之介『吸血妖魅考』筑摩書房 2003 年、32~33 頁参照。
スキートの辞典では、リコーの他に、チャールズ・フォアマンの『1688 年の革命に関する問いと考察（Some Queries and Observations upon the Revolution in 1688)』（1741）への言及がある。フォアマンは、確かに注でヴァンパイアを隠喩として用いてはいるが、このテクストは、表紙にあるように 1741 年に出版されているので、これは 1725 年以前の事例には当てはまらない。「我らが商人は、確かに彼らの国に金をもたらしますが、我々の中には、見返りのない外国へと再び〔金を〕送り出すことを非常に強く主張する人たちがいると言われています。これは、貿易産業を破壊します。こうした人たちは、一般市民にとってのヴァンパイア（the Vampires of the Publick）であり、王国の略奪者（Riflers of the Kingdom）なのです」Charles Forman: Some Queries and Observations upon the Revolution in 1688, and its Consequences; also a Short View of the Rise and Progress of the Dutch East India Company; with Critical Remarks. In a Letter from Paris to the Right Hon. Sir Robert Walpole. London 1741, p. 11, n (a). フォアマンによる使用を根拠に、ウィルソンは、ヴァンパイアという単語の英語圏での初出を 17 世紀だと主張する。Cf. Wilson, op. cit.(n. 17), p. 580f. しかし、ウィルソンの主張は、フォアマンの著作が 1688 年に書かれたと、証拠を提示せずに断言している点で問題を含んでいる。題名にあるように、フォアマンのこの著作は、英国首相ロバート・ウォルポールにパリから宛てた一通の手紙という形式をとっている。そして、この手紙には、「パリ、1733 年 1 月 17 日（PARIS, Jan. 17. 1733.)」と日付が書かれている。仮に、1688 年にこれが書かれたのであれば、日付を 1733 年に設定する理由が見当たらず、また、1688 年のウォルポールはまだ 12 歳にしかならないことから、このテクストが 1688 年に書かれた可能性は低いと推察される。

フランス語テクストについて、研究上でしばしば挙げられるのは、1693年5月の『メルキュール・ガラン（Mercure Galant)』である。[28] これは、古くはドン・オーギュスタン・カルメの手になるヴァンパイア論文で――ここでは『メルクリウス（Mercurius)』と書かれ、1693、1694年の内容がまとめて――言及されている。[29] 1746年に出版された彼の『天使、悪魔、精霊の顕現、並びにシュレージエン、モラヴィア、ボヘミア、ハンガリーのヴァンパイアと蘇る死者についての論考（Dissertations sur les Apparitions des Anges, des Démons & des Esprits. Et sur les Revenans et Vampires. De Hongrie, de Boheme, de Moravie & de Silésie)』は、多くの読者を獲得し、フランスでは1749年、1751年に版を改める。また、ドイツ語圏では1751年、イギリスでは1759年に翻訳されている。注意すべきは、記事の紹介に際してカルメは「ヴァンパイア」という単語を用いているが、『メルキュール・ガラン』の該当箇所では、この単語が使用されていない点である。

> もしかしたら、ポーランドや主としてロシアで確認されている、極めて尋常でないある物事について話されているのを、既にお聞きになったことがあるかもしれない。それは、ラテン語でストリゲス（Striges)、その国の言葉ではウピエルツ（Upierz）と呼ばれる死体のことで、一般人や学識ある人々が血であると確信するような、ある種の体液を有している。この悪魔（Demon）は、生者や数頭の家畜の体から血を抜き出し、それを死体に与えると言われている。なぜなら、人の主張するところでは、この悪魔は、真昼から真夜中までのある時間にその死体から出て、その後、死体に戻り、自分が集めた血をそこに移すとされるからである。時が経つにつれて、血の量は、死体の口や鼻や両耳から流れ出す

[28] Cf. Wilson, op. cit. (n. 17), p. 579; Groom, op. cit. (n. 8), p. 25; Völker, a. a. O. (Anm. 10), S. 505–533, hier S. 506; Bohn, a. a. O. (Anm. 16), S. 86–88; Hamberger, a. a. O. (Anm. 16), S. 73f.

[29] Vgl. Dom Augustin Calmet: Gelehrten Verhandlung der Materie von den Erscheinungen der Geister, und der Vampire in Ungarn, Mähren, etc. Ungekürzte Gesamtausgabe. Norderstedt 2016, S. 301f.

ほど大量に、いわば、死体がその棺のなかで浸かるほどになる。〔…〕[30]

これもまた、1732年の報告書と重なる部分があるとはいえ、ヴァンパイアという呼称は用いられず、1746年にカルメによって言及されるまでは、ヴァンパイアの流布には特に貢献しないのである。

2―2．1732年の事例

1732年の事件の始まり自体は、1731年12月12日に遡れる。この日、「メトヴェット（Metwett）」に住むハイドゥクたちに死者が出たというので、[31]セルビアの「ヤゴディナ（Jagodina）」の帝国軍司令官だったシュネッツァーがグラーザーという医師に調査を命じた。

> モラヴァにあるメトヴェットで死人が出たという報告があり、私〔グラーザー〕はパラキン（Parakin）〔現在のParaćin、Stalać の北部〕の帝国疫病専門医として当地へ向かった。〔…〕どうして六週間の間に13人もの住民が亡くなったと彼らが訴え出たのか、死亡者たちが死ぬ前に何を訴えていたかについて、私がさらに聞き込みをすると、住民たちは、同様に、脇腹の刺すような痛み、胸の痛み、長続きする熱、手足のリューマチ痛を伝えた。しかし、そうした病状のせいで、追いつかないほど矢継ぎ早に葬儀が起きるのではなく、いわゆるヴァンパイアあるいは吸血者（die genannten Vambyres [sic], oder Bluthseiger）がいるせいだと彼らは思い込んでいた。〔…〕[32]

---

30 Cf. Mercure Galant, Paris, Mai 1693, pp. 62–69, ici pp. 62–64.

31 ハイドゥクとは、オスマン帝国に対して15世紀末に配備されたハンガリー地方の兵士を指す。Vgl. Michael Ranft: Traktat von dem Kauen und Schmatzen der Toten in Gräbern. Michael Ranft in einer Bearbeitung von Nicolaus Equiamicus. Diedorf 2006, S. 92, Anm. 66.

32 グラーザーの報告書は以下を参照。Bericht des Contagions-Medicus Glaser an die Jagodiner Kommandantur（nach dem 12. 12. 1732 [sic]）. In: Hamberger, a. a. O.（Anm. 16）, S. 46–49.

この報告はベオグラードの司令部にも送られたが、ヴュルテンベルク公不在の折だったため、暫定司令官であったアントン・ボッタ・ダドルノは軍医ヨハン・フリュッキンガー他数名を派遣し、さらなる調査を命じた。フリュッキンガーの調査は1732年1月7日に開始され、その報告書は1月26日にベオグラードの司令部にて処理されている。[33]

> メドヴェギア（Medvegya）〔現地語ではメドヴェジャ Medvedja〕の村で、いわゆるヴァンパイア（die sogenannte Vampyrs）が数名の血を吸って殺したという通報があった後、私は誉れある最高司令部のいと高き命を受け、事件をくまなく調査するために、それに任じられた数名の士官と二人の軍医とともに当地へ派遣された。シュタラータ〔現在のStalać〕のハイドゥクの大佐（der Stalater Heydukhen Capitain）であるゴルシッツ、少尉（ハドナック）（Hadnack）、村長（バリアクタル）（Barjactar）、それと村の最年長のハイドゥクを連れて調査し、[34] 以下のことが聴取された。

---

33 フリュッキンガーの報告書は以下を参照。Visum et Repertum. Über so genannten Vampirs oder Blut-Aussauger, so zu Medvegia in Servien, an der Türckischen Granitz, den 7. Januarii 1732 geschehen. Nebst einem Anhang von dem Kauen und Schmatzen der Todten in Gräbern. Nürnberg 1732, S. 3–11, 12–15; Bericht des Regimentsfeldschers Flückinger an die Belgrader Oberkommandantur (26. 1. 1732). In: Hamberger, a. a. O.（Anm. 16), S. 49–54. 訳出にあたっては以下を参考にした。Barber, op. cit.（n. 25), pp. 16–18; バーバー、前掲書（注25)、41~46頁。フリュッキンガーの報告書は、『見聞録（Visum et Repertum)』という題で、著者不明のヴァンパイア論の補遺と共に出版された。ここにはフロムバルトの報告書も掲載されている。Vgl. Visum et Repertum, ebd., S. 3–11, 12–15.

34 ランフトの論文を編纂し、注釈をつけたニコラウス・エクイアミクスによれば、Hadnack は「ハンガリーの少尉（ungarischer Leutnant)」を意味し、Barjactar は逐語訳では「旗手（Bannerträger)」、元来は「族長（Stammesführer)」を意味するが、ここでは「村長（Dorfoberster)」として用いられているという。Vgl. Ranft (2006), a. a. O.（Anm. 31), S. 91, Anm. 65. クロイターも Hadnack と Barjactar を「肩書き（Titel[ ])」だとみなしている。Vgl. Kreuter, a. a. O.（Anm. 22), S. 119. この二人と異なり、ハンベルガーは「der Gorschitz（Kapitän)」と記述しているので、Gorschitz を人名ではなく「大佐（Kapitän)」を意味する役職名とみなしていると考えられる。Vgl. Hamberger, a. a. O.（Anm. 16), S. 49.

> 皆が一様に言うことには、約五年前にこの土地のハイドゥクの一人であるアルノント・パウレ（Arnont Paule）が干草の荷馬車から落ちて首を折った。彼はしばしば生前に、トルコ領セルビアのコッソヴァ（Cossowa）でヴァンパイアに悩まされており、そうした災厄から解放されるために、そのヴァンパイアの墓土を食べて血を体に塗ったと話していた。彼の死後 20~30 日たって、数名の者がこのアルノント・パウレに襲われていると訴え、実際に四人が彼に殺された。〔…〕

「アルノント・パウレ」は、「人間だけでなく家畜たちも襲って血を吸った」とされ、そのせいでさらに被害が広がったと村人たちは訴えている。

この 1732 年の事件は、数々の媒体で報じられている。[35]『ジェントルマンズ・マガジン（The Gentlman's Magazine）』の 1732 年 3 月号には、以下のようにある。

> ハンガリーのメドレイガ（Medreyga）で、ヴァンパイア（Vampyre[ ]）と呼ばれるある種の死体が、数名を、その血を全て吸いつくすことによって殺した。[36]

---

35 いかに様々な媒体で、セルビアのヴァンパイア事件が取りあげられたかについては、以下を参照。Groom, op. cit. (n. 8), pp. 36–40; Schroeder, a. a. O. (Anm. 24), S. 70–114; Bohn, a. a. O. (Anm. 16), S. 132. また、注 16 も参照。

36 Cf. The Gentleman's Magazine, or Monthly Intelligencer. For March 1732. No. XV. In: The Gentleman's Magazine, or Monthly Intelligencer. For the Year 1732, vol. II. London 1732, pp. 637–684, here p. 681.『オックスフォード英語辞典（Oxford English Dictionary）』は、1745 年の『ハーレイアン・ミセラニー（The Harleian Miscellany）』に掲載された『三人のイギリス人紳士によるヴェネチアからハンブルクへの旅（Travels of 3 English Gentlemen from Venice to Hamburg）』を引いているが、ウィルソンが述べるように、英語圏テクストにおけるヴァンパイアという単語の初出は、これではないということになる。Cf. The Oxford English Dicitionary. Second Edition. Prepared by J. A. Simpson and E. S. C. Weiner. Volume XIX. Unemancipated – Wau–Wau. Oxford 1989, p. 422, art. "vampire"; Wilson, op. cit. (n. 17), p. 581.

アリベルト・シュレーダーによれば、1732年3月11日の『ロンドン・ジャーナル（The London Journal)』の「ウィーンからの私信の抜粋（Extract of a Private Letter from Vienna)」でも、セルビアの事件がとりあげられている。同年5月の『ロンドン・マガジン（The London Magazine)』は、事件を報じるだけでなく、「政治上のヴァンパイアたち（Political Vampyres)」の見出しのもと、ヴァンパイアを政治風刺の比喩として用いている。[37] また、フランスでは、1732年の事件が同年3月の『グラヌー（Le Glaneur)』に報じられている。

> 約5年前、メドレイガ（Medreyga）の住人であるアルノルト・パウルという名前のハイドゥクが、干し草の荷車からの落下によって圧死した。彼の死から30日後、4人が急死した。それも、その地方の伝承にしたがえば、ヴァンパイア（Vampires）に暴力を振るわれた者が死ぬような死に方をしていたという。〔…〕[38]

辞書・事典類には――ヴァンパイア関係のものは除くとして――この事件に触れているものと触れていないものがある。例えば、語源関係の辞書などは、皆一様に触れていない。[39] また、ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・

---

37 Cf. The London Magazine. May 1732. In: The London Magazine: or, Gentleman's Monthly Intelligencer. Vol. 1（1732）. London 1732, pp. 76f.

38 Cf. Le Glaneur historique, moral, litteraire, galant et calottin, pour Lundi 3. Mars 1732. In: Le Glaneur historique, moral, litteraire, galant, et calottin. Ou recueil des principaux Evenemens arrivés dans le courant de cette Année; accompagnés de Réflexions. On y trouve aussi les Piéces fugitives, les plus curieuses, qui ont paru, tant en Vers qu'en Prose, sur toutes sortes de sujets, & en particulier sur les Affaires du Tems. Pour l'Année 1732, Tome II. La Haye 1732, No. XVIII.

39 Vgl. Norwegisch-Dänisches Etymologisches Wörterbuch. Auf Grund der Übersetzung von Dr. H. Davidsen neu bearbeitete deutsche Ausgabe mit Literaturnachweisen strittiger Etymologien sowie deutscem und altnordischem Wörterverzeichnis von H. S. Falk und Alf Torp. Zweiter Teil. P – Ø. Heidelberg 1911, S. 1347, Art. „Vampyr"; Friedrich Kluge（Hrsg.): Etymologisches Wörterbuch

グリム兄弟の辞書でも、『オックスフォード英語辞典（The Oxford English Dictionary)』でも事情は同じである。[40]『ドイツ外来語辞典（Deutsches Fremdwörterbuch)』は、ヴァンパイアという言葉が使用された18世紀から20世紀のテクストの名前を挙げてこそいるものの、事件に言及することはない。[41]　逆に、事件に言及している辞書・事典類としては、18世紀半ばに編纂されたヨハン・ハインリヒ・ツェードラーの『万物百科大事典（Grosses vollständiges Universal-Lexikon)』と、19世紀初頭に編纂されたヨハン・クリストフ・アーデルングの『高地ドイツ語話法文法的・批判的辞典（Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart)』、20世紀では『ドイツ迷信辞典』が挙げられるだろう。[42]

---

der deutschen Sprache. 21. unveränderte Auflage. Berlin / New York 1975, S. 810, Art. „Vampir"; Russisches Etymologisches Wörterbuch von Max Vasmer. Dritter Band. Sta – Ÿ. Heidelberg 1958, S. 186, Art. „ у п ы р ь ". Etymologisches Wörterbuch des Deutschen. M – Z. 2. Auflage, durchgesehen und ergänzt von Wolfgang Pfeifer. Berlin 1993, S. 1494, Art. „Vampir".

40 Vgl. Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm. Zwölfter Band. I. Abteilung. V–Verzwungen. Bearbeitet von E. Wülcker, R. Meiszner, M. Leopold, C. Wesle und der Arbeitsstelle des Deutschen Wörterbuches zu Berlin. Leipzig 1956, S. 10 Art. „Vampyr"; The Oxford English Dicitionary, op. cit. (n. 36)

41 Vgl. Deutsches Fremdwörterbuch. Begonnen von Hans Schulz, fortgeführt von Otto Basler, weitergefürht im Institut für deutsche Sprache. Sechster Band. U – Z. Bearbeitet von Gabriele Hoppe, Alan Kirkness, Elisabeth Link, Isolde Nortmeyer, Gerhard Strauß unter Mitwirkung von Paul Grebe. Berlin / New York 1983, S. 105–108, Art. „Vampir".

42 Vgl. Johann Heinrich Zedler（Hrsg.）: Grosses vollständiges Universal-Lexikon. 2. vollständiger photomechanischer Nachdruck durch die Akaemische Druck- u. Verlagsanstalt. Band 46. V – Veq. Graz 1997, Sp. 474–482, Art. „Vampyren, oder Blutsauger"; Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart mit beständiger Vergleichung der übrigen Mundarten, besonders aber der Oberdeutschen, von Johann Christoph Adelung. Vierter Theil, von Seb – Z. Wien 1811, Sp. 975., Art. „Vampyr"; Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. Band VI, a. a. O.（Anm. 9）アーデルングは、「アメリカ産の蝙蝠」としての用法に言及してもいる。本論の対象は、19世紀初頭の文学テクストなので、『ドイツ迷信辞典』は詳述しない。

ツェードラーは、1725 年と 1732 年の事件を余すところなく――ただし、グラーザーの事前調査には触れない――伝え、その後、いささか説得力にかける根拠をもって、ギリシャの「ブルコラカス（Burcolaccas）」がヴァンパイアの起源だと主張する。

> 間違いなく、このブルコラカスに、ヴァンパイアはその起源を持つ。なぜなら、両者の間には、完全な類似性が見出されるからである。ブルコラカスは、人間を急に殺すとされるが、ヴァンパイアもまた同じである。ブルコラカスは、墓の中で食べ、それによって新鮮で生き生きとしたままでいるが、ヴァンパイアは己の栄養のために、生者の血を吸い、それによって、腐敗せず生き生きとした状態を保っている。

アーデルングも、1732 年の事件を要約して紹介した後でギリシャに言及する。

> ある土地の地質は、死体を長いこと腐敗させずに保つということが今や証明されているにもかかわらず、セルビア、ハンガリー、そこに併合された土地の大多数は、相変わらずヴァンパイアを信じており、特に、教会から破門された状態や魔術に関わって死んだ者をそれとみなす。ハイドゥクが信仰しているギリシャ正教会では、この迷信が既にとても古いことは、特に〔シャルル・〕デュ・フレーヌの『中期及び末期ギリシャ語辞典（Lex. med. et inf. Graecitatis）』から明らかにされている。この辞典では、彼らは、死後に太鼓のように膨らむとされるので、ブルコラケやテュンパニテ（Bulcolaccae und Tympanitae）と呼ばれている。

1725 年や 1732 年の事件の報告書には見られなかったギリシャとの繋がりは、こうして少しずつ、辞書・事典類における説明に顔を出す。そして、後には 19 世紀頃の文学テクストにおいても見られるようになる。

３．19 世紀初頭の文学テクストにおけるヴァンパイアの説明

1732 年の事件、つまりセルビアないしハンガリーと結びつけられて西洋に知られることとなったヴァンパイアだが、19 世紀初頭の文学に受容される際には、ギリシャとの結びつきが強調される。『ニュー・マンスリー・マガジン（The New Monthly Magazine）』（1819 年 4 月 1 日）に掲載されたポリドリの『ヴァンパイア』の前書きで、編集者はヴァンパイアについて説明している。当時、既にヴァンパイアを扱った作品がいくつかあったものの、少なくとも、こうして説明が必要であると編集者が判断するほどには、ヴァンパイアはまだ読者層に浸透していなかったと言える。この前書きでは、1732 年の事件だけでなく、ポリドリに先行してヴァンパイアに言及した英文学テクスト――ロバート・サウジーの『破壊者タラバ（Thalaba the Destroyer）』（1801）、ジョージ・ゴードン・バイロンの『ジャウア（The Giaour）』（1813）がとりあげられている。[43] そして、これらのテクストは、ヴァンパイアをギリシャと関係づけているのである。

『破壊者タラバ』は、主人公タラバが運命に導かれ悪の魔術師一団と対決するという内容の、中東を舞台にした叙事詩である。物語は、特にヴァンパイアを中心に筋が展開するわけではないが、道中でタラバは、死んだはずの婚約者オネイザと相まみえる。ここで、彼女は「ヴァンパイアの死体（the vampire corpse）」（TD 103）と表現される。そして、この vampire に注が付されている。

「『ユダヤ人の手紙』に、1736 年 10 月の『メルキュール・イストリーク・

---

43 Cf. Robert Southey: Thalaba the Destroyer. The Second Volume. London 1801; George Gordon Byron: The Giaour. A Fragment of a Turkish Tale. Seventh Edition, with some Addition. London 1813. 以降、『破壊者タラバ』については、本文に略号 TD と頁数、『ジャウア』については、本文に略号 GB と頁数のみを記す。1810 年には、ジョン・スタッグが『ヴァンパイア（The Vampyre）』という詩を発表し、その前書きでヴァンパイアを迷信とみなして嘲笑しているが、スタッグはポリドリの小説の前書きでは触れられていない。John Stagg: The Vampyre. In: idem: The Minstrel of the North: or, Cumbrian Legends. Being a Poetical Miscellany of Legendary, Gothic, and Romantic, Tales. London 1810, pp. 261–268.

エ・ポリティーク』からの、次のような抜粋がある」という但し書きとともに、サウジーはこの注を始めている。この『ユダヤ人の手紙』というのは、ジャン＝バティスト・ド・ボワイエ・ダルジャン侯の『ユダヤ人の手紙（Lettres Juives)』(1738）のことで、ヴァンパイアを扱った初の文学作品とされるハインリヒ・アウグスト・オッセンフェルダーの詩『ヴァンパイア（Der Vampir)』(1748）が掲載された週刊誌『ナトゥーアフォルシャー（Der Naturforscher)』の 47 号（1748 年 5 月 18 日）にも、同箇所が引用されている。[44]『ユダヤ人の手紙』のこの箇所は、1725 年の「キシロヴァ（Kisilova)」の事件や、1732 年の「メドレイガ（Medreiga)」の事件を伝えているが、サウジーは他にも、ピトン・ド・トゥルヌフォールが伝えるギリシャの「ミュコノス島（Mycone)」で起きた事件（1700/1701 年）について述べている。[45] ここで描かれる怪物は、ヴァンパイアではなく、人の血を吸うわけでもない。トゥルヌフォールの報告は、死んだ男が「ヴルコラカス（Vroucolacas)」となって様々な害をなしたという事件についてのもので、住民たちの間に巻き起こった混乱を詳細に伝えている。[46]

『ジャウア』もサウジーの『破壊者タラバ』と同じで、ヴァンパイアを主眼に据えた物語ではない点には注意する必要がある。本作では、恋人であるイスラム圏の女奴隷を殺されたために、その主人に復讐するキリスト教徒（敵役であるイスラム教徒たちから、彼らの言葉で異教徒を意味する「ジャウア」と呼ばれる）が描かれるが、彼に対する語り手（イスラム教徒の漁師）の呪詛としてヴァンパイアが用いられている。

---

44 Der Naturforscher. Sieben und vierzigstes Stück. In: Der Naturforscher, eine physikalische Wochenschrift. auf die Jahre 1747 und 1748. Zweiter Theil. Leipzig 1748, S. 367–372.

45 Cf. Southey, op. cit.（n. 43), pp. 103–121. 邦訳では、トゥルヌフォールの部分は割愛されている。ロバート・サウジー『タラバ、悪を滅ぼす者』（道家英穂訳）作品社 2017 年、236~238 頁。

46 この報告は、以下でも確認することができる。Barber, op. cit.（n. 25), pp. 21–28.; バーバー、前掲書（注 25)、54~61 頁 ; Hamberger, a. a. O.（Anm. 16), S. 66–71.

〔…〕しかしまず、地上にヴァンパイア（Vampire）として送られ／お前〔キリスト教徒〕の死体は墓からひっさらわれよ／それから身の毛もよだつ姿で、お前の生まれ故郷に出没し／お前の一族全ての血を吸うのだ／そこに住むお前の娘、姉妹、妻から／真夜中に命の流れを飲み干すのだ〔…〕（GB 37）

〔…〕お前自身の大事なものの血で濡れた／きしる歯とやつれた唇から、血が滴り落ちよ／それからお前の陰鬱な墓へ忍び帰れ――／行くがいい――そしてグール（Gouls）やアフリート（Afrits）どもと騒ぐがいい〔…〕（GB 38）

ここには墓から蘇り、血を吸う存在としてのヴァンパイアが描かれているが、この場面には注が付され、ヴァンパイアが解説されている。

注 37、37 頁、11 行
「しかしまず、地上にヴァンパイアとして送られ」
ヴァンパイアの迷信は、いまだにレヴァント〔地中海東部沿岸の地域〕で一般的である。信頼できるトゥルヌフォールは長い話を伝えており、サウジー氏は『タラバ』の注でこうした「ヴルコロカス（Vroucolochas）」とトゥルヌフォールが呼ぶ者について引用している。現代ギリシャの（The Romaic）言葉では「ヴァルドゥラカ（Vardoulacha）」である。私は、ある一家全員が、子供の叫び声に恐怖したことを思い出す。彼らは、そのような者がやってきたせいで、子供が叫んだに違いないと想像したのだ。ギリシャ人は恐怖なしにその単語を口にすることは絶対にない。私が思うに、「ブルコロカス（Broucolokas）」が古代の正統なギリシャ語の名称である ― 少なくとも、アルセニウスはそう呼ばれた。彼はギリシャ人によると、死後に悪魔によって蘇生された人物である ― しかし、現代のギリシャ人は私が

言及した単語を用いる。(GB 72)

注 38、38 頁、17 行
「お前自身の大事なものの血で濡れた」
顔のみずみずしさ、血で濡れた唇は決して見落とすことのないヴァンパイア（Vampire）の徴候である。ハンガリーやギリシャで語られる、こうしたぞっとするような食人者たち（these foul feeder）の物語は風変わりで、極めて信じ難いことに、確かだとされている話もある。(ibid.)〔傍点原文イタリック〕

腐敗しない死体（「顔のみずみずしさ」）や吸血（「血で濡れた唇」）など、1732 年の事件で見られる特徴に言及しながらも、バイロンは、サウジーを経由したトゥルヌフォールに依拠して、ハンガリー（1732 年の事件）よりも、むしろギリシャにヴァンパイアを紐づける。この理解は、ポリドリの『ヴァンパイア』における解説でも、一部引き継がれることになる。

ポリドリの『ヴァンパイア』の前に置かれた編集者の手になる紹介文は、[47] 以下の記述で始まる。

この物語が依拠している迷信は、東洋では極めて一般的である。アラブ人たちの間では、それはよく知られているようである。しかし、キリスト教の確立までは、この迷信はギリシャ人にまでは広まらなかった。ただ、ローマ・カトリック教会とギリシャ正教会への分離以来に現在の姿をとるようになったと仮定される。この時から、ギリシャ正教の領地に埋められるとローマ・カトリック教徒の死体は腐敗しないという考えが流布し始め、次第に数を増やしていった。それは、多くの今もまだ現存

47 前書きは、以下を参照。Appendix A. In: The Vampyre and Other Tales of the Macabre, op. cit. (n. 18), pp. 240–243; The New Monthly Magazine. 1819. Part I. January to June. Vol. XI. No. 63. April 1, 1819. London 1819, p. 195f.

> する不可思議な話の主題を形成した。つまり、若く美しい者の血で自らを養い、墓から蘇る死者である。それは西洋でいくらか変更されて広がり、ハンガリー全土、ポーランド、オーストリア、ロレーヌにおいて、以下のような信仰が存在した。すなわち、ヴァンパイア（vampyres）は夜に犠牲者の血を一定量摂取するが、そうした犠牲者は消耗し、力を失い、衰弱のために速やかに死亡する。一方でそうした人間を吸血する者たちは肥え太る――そして、その血管は血で満ちて膨張し、その体のあらゆる通り道から、皮膚の毛穴からさえも血を流出させる。

編集者はこの後に、「1732年3月の『ロンドン・ジャーナル』」で紹介された「ハンガリーのメドレイガ（at Madreyga, in Hungary）」で起きた事件の説明を続ける。[48] 次に、ギリシャに話を移す。

> ギリシャの多くの地域では、死んだ人間が、ヴァンパイアとなるよう定められることは、生きているうちに犯した凶悪な罪に対する死後の罰の一種だとみなされている。このヴァンパイアは、地上にあったときの最愛の人々、親族関係や愛情の絆で結ばれていた人々にのみ、地獄の訪問を続けることを強いられる。

そして、バイロンの『ジャウア』内の、ヴァンパイアに触れた一節を引用す

---

48 この際、「ヴァンパイア」という単語に、以下の注が付されている。「一般的に信じられているのは、ヴァンパイアによって吸われた人物もまたヴァンパイアになり、今度は彼が吸う側になるということである（The universal belief is, that a person sucked by a vampyre becomes a vampyre himself, and sucks in his turn.）」。この文章は、サウジーの注にある文章と、ほとんど文言が変わらないので、編集者がサウジーを参照した可能性がある。「〔…〕今の定説は、ヴァンパイアによって吸われた人物もまたヴァンパイアになり、今度は彼が吸う側になるということである。（[...] now the established opinion is that a person sucked by a Vampire, becomes a Vampire himself, and sucks in his turn.）」Southey, op. cit.（n. 43）, p. 108.

る。この後、書き手は、サウジーの「ヴァンパイアの死体」と、「真実を語る（veracious）」トゥルヌフォールによる「ヴァンパイア信仰の驚くべきいくつかの事例」、また、ヴァンパイア信仰を「古典的だが、同時に野蛮人の誤り（barbarian error）でもあると証明する」カルメを、一段落で要約する。最後は、次のような文言で締めくくられる。

> この並外れて恐ろしい迷信については、多くの好奇心をそそる興味深い記述を加えることができるし、おそらく、またの機会に、それについての考察を再開するかもしれない。今のところは、読者の注意を喚起する奇異な作品の説明に割く必要のある覚書の限界を、はるかに超えていると感じる。そこで、ヴァンパイア（Vampyre）という用語が最も一般的に受け入れられているものだが、これの同義語がいくつかあり、それらは世界の様々な地域で使用されているということだけを述べて結びとする。すなわち、ヴルコロカ（Vroucolocha）、ヴァルドゥラカ（Vardoulacha）、グール（Goul）、ブルコロカ（Broucoloka）などである。――編集者（ED.）

使用単語を見るに、この箇所は、明らかに『ジャウア』を参照している。サウジーがトゥルヌフォールを引用したことにより、『ジャウア』を通してポリドリに輸入されたギリシャの類縁の怪物たちは、ついにヴァンパイアの「同義語」となるに至るのである。

４．ヴァンパイアの定義と名称について

以上のことから、19 世紀初頭において、ヴァンパイアは、1732 年の事件だけでなくギリシャをも想起させる存在であった。現に、ポリドリの『ヴァンパイア』本編では、ギリシャに「ヴァンパイアのたまり場（the resort of the vampyres）」[49] があり、主人公オーブリが、そこでヴァンパイアに襲わ

[49] John Polidori: The Vampyre. In: The Monthly Magazine, op. cit.（n. 47）, pp.

れることで、ヴァンパイアとギリシャの結びつきがことさらに強まる。ヴァンパイアとギリシャの結びつきを、どこまで遡ることができるかは定かでないが、少なくともツェードラー（1745）や、カルメ（1746）、ヴォルテール（1785）は、これに貢献していると考えられる。特に、カルメとヴォルテールは、トゥルヌフォールに言及しているので、サウジーはここから情報を得た可能性がある。[50]

しかし、ヴァンパイアは、決してギリシャに飲み込まれたわけではなかった。「同義語」が紹介されても、ヴァンパイアは、「ヴルコロカス」などの名称に取って代わられることはなかった。ヴァンパイアは、「ヴァンパイア」と表記されることが、19 世紀においては――そして、おそらく現代でも――重要だった。このことは、文学作品であれ研究書であれ、ヴァンパイアを扱うテクストが証し立てている。それらのほとんどが、例えば英仏独語圏であれば、「Vampyr / Vampir / vampyre / vampire」というように、「ヴァンパイア」という――今では普通名詞と化した――固有名詞を題に掲げているのである。オッセンフェルダーの Der Vampir、ジョン・スタッグの The Vampyre、ユーライア・デリック・ダーシーの『黒人ヴァンパイア（The Black Vampyre）』（1819）、ポリドリの The Vampyre と、その数々の舞台翻案、カール・シュピンドラーの『ヴァンパイアとその花嫁（Der Vampir und seine Braut）』（1826）、イギリスのペニー・ドレッドフル『ヴァンパイアのヴァーニー、あるいは血の饗宴（Varney the Vampire; or, the Feast of Blood）』（1845–1847）など、挙げればきりがない。「ヴァンパイア」とは、少なくとも 19 世紀初頭においては、1732 年の事件によって広まったあの

196–206, here p. 200; In: The Vampyre and Other Tales of the Macabre, op. cit.（n. 18）, pp. 3–23, here p. 10; In: The Vampyre and Ernestus Berchtold; or, the Modern Œdipus. Edited by D. L. Macdonald and Kathleen Scherf. Toronto 2008, pp. 39–59, here p. 47.

50 Vgl. Calmet, a. a. O.（Anm. 29）, S. 332–336; Voltaire: Dictionnaire Philosophique. In: Œuvres Complètes, Band 37–43. Kehl 1785, art. “vampire”. Zit. nach Von denen Vampiren, a. a. O.（Anm. 10）, S. 483–489, hier S. 484f.

ヴァンパイアを指す名称なのである。[51]

ただし、ヴァンパイアは、常に言説として増殖し続け、あるテクストによる別のテクストの参照と並行して、新たなイメージや特徴を付け足されていく。フランスで流行したポリドリの翻案のなかでも代表的な、シャルル・ノディエの『ヴァンパイア（Le Vampire）』（1820）では、ギリシャの代わりにスコットランドが前面に押し出され、これをもとにしたドイツ語圏の翻案でも、それは受け継がれている。[52] また、ポリドリの『ヴァンパイア』と同年にアメリカで出版された、ダーシーの『黒人ヴァンパイア』は、ハイチ革命を下敷きにしており、脱走した黒人奴隷がヴァンパイアとなり、他の怪物や黒人奴隷たちを扇動し、セント・ドミンゴを舞台に革命を起こそうとして失敗する。ここでは、ヴァンパイアは、「オベア（Obeah）」という西インド諸島のアフリカ系人種に伝わる魔術とも関係づけられる。[53] このように、ポ

51　このことは、日本語に浸透している「吸血鬼」という訳語の使用の見直しをも促す。「吸血鬼」を使うならば、例えば、扱うテクスト内で「吸血鬼」が用いられている場合のみなど、特定の場合に限定する必要があるだろう。作家たちは、bloodsucker などの「吸血者」にあたる自国語の名詞を題にほとんど用いなかった。ヴィーツによれば、J・V・アドリアンは、ポリドリの独訳の際に、「Der Blutsuger [sic]」というタイトルを使用したという。Cf. Viets, op. cit（n. 18）, p. 99. しかし、他の多くの作品を見るに、これは稀な例であると言えよう。「吸血鬼」という訳語をみだりに使うことは、「ヴァンパイア」という表記が有する背景を覆い隠してしまうことになりかねない。

52　拙論（2020 年）、上掲書（注 18）参照。

53　Cf. Uriah Derick D'Arcy: The Black Vampyre. A Legend of St. Domingo. Second Edition, with Additions. New York 1819, pp. 7–43. ケイティ・ブレイによれば、初版が 1819 年 6 月 23 日の『ニューヨーク・イヴニング・ポスト（The New-York Evening Post）』で広告されており、第二版は同年 8 月に出版された。また、1845 年には、『ニッカーボッカー（The Knickerbocker）』で、一部が再録されている。Katie Bray: "A Climate … More Prolific … in Sorcery": The Black Vampyre and the Hemispheric Gothic. In: American Literature. Vol. 87, No. 1（March, 2015）, pp. 1–22, here pp. 1f.; The Knickerbocker, or New-York Monthly Magazine. Volume XXV. January, February. New-York 1845, pp. 73–77, pp. 171–173. ダーシーの小説の最終行の文言が、ポリドリの小説の最終行の文言とほとんど同じである点や、自分の小説の登場人物が後にルスヴン卿となったと仄めかしている点からすれば、

リドリの出版から時を置かずして、既にヴァンパイアのイメージは変化を加えられている。

何より、ポリドリの『ヴァンパイア』自体も、バイロンと恋仲にあったキャロライン・ラムの『グレナーヴォン（Glenarvon）』（1816）や、[54] バイロンの未完の〈断章（A Fragment）〉[55] に依拠しつつ、貴族的でバイロン的

ダーシーは、ポリドリを明らかに揶揄している。Cf. D'Arcy, ibid., p. 19, n.; p. 43. また、「私たちの種、グールであれ、アフリート、ヴァンパイア、ヴルコロカス、ヴァルドゥラコス、ブルコロカスであれ（– To ourselves – whether Gouls, – or Afrits, – or Vampyres; – Vroucolochas, – Vardoulachos, – Broucolokas）」という作中の黒人ヴァンパイアの演説からすれば、バイロンの『ジャウア』も明らかに意識している。Cf. D'Arcy, ibid., p. 36. また、『黒人ヴァンパイア』に付された『道徳（Moral）』という散文と、『ヴァンパイアリズム、詩（Vampyrism; A Poem）』では、ヴァンパイアが搾取者の隠喩として使用されている。Cf. Moral. In: The Black Vampyre, ibid., pp. 45–48; Vampyrism; A Poem. In: ibid., pp. 49–69.

54 ルスヴン卿の名前は、バイロンがモデルだったグレナーヴォン卿こと、クラレンス・ド・ルスヴンから採られている。Cf. Introduction. In: The Vampyre and Ernestus Berchtold; or, the Modern Œdipus、op. cit.（n. 49）, pp. 9–31, here p. 13. グレナーヴォン卿は、アイルランド革命を率いる闘士であると同時に、ルスヴン卿のように非常に魅力的な人物として描かれ、彼の人気が「熱狂（rage）」、「流行（fashion）」、「疫病（pestilence）」などと形容される。Cf. Caroline Lamb: Glenarvon. Edited with an introduction and notes by Deborah Lutz, Kansas City 2007. p. 109.『ヴァンパイア』の出版は、ポリドリにとって寝耳に水であったので叶わなかったが、後にポリドリは、このあからさまな名前を「ストロングモア卿（Lord Strongmore）」に変更しようとしていた。Cf. The Vampyre and Ernestus Berchtold, ibid, p. 35, p. 41（n. 1）

55 ここでは、年若い「私」と年長の友人オーガスタス・ダーヴェル（これは仮名である）との旅が描かれるが、これには『ヴァンパイア』のオーブリとルスヴン卿、ひいてはポリドリとバイロンの関係が明らかに反映されている。George Gordon Byron: A Fragment. In: idem: Mazeppa, A Poem. London 1819, pp. 59–69. 出版したのは、これまでにもバイロンの著作を引き受けていたジョン・マレーである。バイロンは、彼が許可なく〈断章〉を世に出したことに対して不満を告げていた。「去年、私を欺いてあなたが『マゼッパ』の後にあの散文を掲載したことを、私は許すわけにはいきません――あれは定期刊行物に載せるのでなければ、出版しないようにとあなたに送りました。そして、あなたは説明の言葉もなく、それを『マゼッパ』に添えたので、驚き呆れ果てています〔傍点原文イタリック〕」Appendix C. Augustus Darvell. In: The Vampyre and Other Tales of the Macabre, op. cit.（n. 18）, pp. 246–251, here p. 246.

なヴァンパイアという革新的なイメージを打ち立てたのだった。ヴァンパイアは、ポリドリにおいてある種のパラダイム転換を迎えたと言えるだろう。ポリドリ以前の段階では、1732年の事件やそれに続く議論を想起させる土臭い怪物であった。しかし、ポリドリ後は、素性の知れない貴族であり、美しい誘惑者で、悪のための悪を好むルスヴン卿のイメージがついてまわる。ただし、同時に、ポリドリの影響をあまり大きく見積もりすぎることも、また禁物である。ポリドリを通して、貴族的な新しいヴァンパイア像が広く受け入れられたことは事実と認めてよい。しかし、このポリドリの影響が、1830年代以降にどのように続いたか――あるいは続かなかったのか――という点は、今後、慎重に考察を重ねていかねばならない。それに伴い、ポリドリ以後のヴァンパイアの定義もまた、精緻化されていく必要があるだろう。